

特定非営利活動法人(国税庁認定)
柔道教育ソリダリティー

第12 回講演会

第一部

外国からの指導者・選手受入支援

「3人の女子柔道家からの報告」

第二部

「柔道を通じた日中交流を語る」

2012年5月31日(木)

於 JICA地球ひろば 講堂

— 本日はお忙しい中、多くの方々にお越しいただきまして心より感謝申し上げます。司会を務めさせていただきます事務局の光本でございます。

本日の講演会に入る前に、本法人の事業の一つであります、「外国からの指導者・選手受入支援事業」について、3人の研修生よりその内容を報告いただきます。

彼女たちは、日本の柔道を学ぶために昨年来日し、12月から半年間の研修を行ってきました。お一人は、アフガニスタン出身の女子柔

道選手フアヒマ・レザイさんです。あとの二人はロシアの女子柔道指導者として活躍される、フローラ・ミカタリアンさんとカーチャ・ブラウステバさんです。

アフガニスタン出身のレザイさんについては、今年1月にNHKで取り上げられ、『アフガニスタン五輪夢見る女性』というテーマで放映されました。はじめに、その録画をご覧いただきたいと思います。

NHK海外ネットワーク

『アフガニスタン五輪夢見る女性』

(2012年1月28日放映)

— ナレーション —

柔道で世界を目指したいとアフガニスタンから日本へ渡った女性もいる。フアヒマ・レザイさん(24)。昨年11月に来日し、柔道の名門、東海大学で練習を続けています。指導者は、シドニーオリンピックの金メダリスト井上康生さん。アフガニスタンには、練習する施設もほとんどなく、選手も数えるほどしかいません。これまで本格的な指導を受けたことのなかったレザイさんにとって全てが新鮮です。

「私が頑張っているのは自分の

ためだけではありません。私を見ていてくれるアフガニスタンの女性たちにも希望をもってほしいと思つて頑張っているのです」

来日を実現させたのは、この人です。ロサンゼルスオリンピック金メダリストの山下泰裕さん。足の怪我に屈せず、一本勝ちした決勝戦は今も語り継がれています。山下さんは引退後、世界に柔道を広める活動を続けています。レザイさんも山下さんに招かれ、日本で柔道を学んでいます。得意とする投げ技から寝技に持ち込む技を磨こうと、直接アドバイスを受けました。この日は、脇をしっかりしめることが大切だと教わりました。

16歳から柔道を始めたレザイさん。日本にまで来て競技に打ち込む理由のひとつに、姉への思いがあります。欧米の音楽やファッションを紹介するテレビ番組の司会者だった姉のシャイマさん。7年前、自宅で何者かによって殺害されました。イスラムの教えに反するとして番組が批判を受ける最中のことでした。女性の社会進出を強く望んでいた姉。憧れだった姉の遺

志を継ぐために自分にできることは何か。レザイさんは大好きな柔道で世界の舞台に立ち、活躍することだと考えています。

57kg級で戦ってきたレザイさんは、同じ階級の世界の選手に比べて小柄です。階級を下げるために栄養士の指導の下、減量にも取り組んでいます。一番の支えとなっているのが、カブールに住む両親との電話です。「目標は勝つことです。私は、アフガニスタンに金メダルをもたらす最初の女性になります」祖国への思いを胸にオリンピックを目指す、レザイさん、大舞台での活躍がアフガニスタンの女性たちの希望になると信じています。

— ご視聴ありがとうございます。—
— それでは、フアヒマ・レザイさんをご紹介しますと思います。

フアヒマさんは、昨年の12月からアフガニスタンの女子柔道選手としてロンドンを目指し、東海大学を中心に強化練習をしまっていました。たいへん残念なことですが、諸事情によりロンドンオリンピックに行くこ

とができませんでした。彼女が日本に残した足跡と友情は、これからも本法人とアフガニスタンの架け橋となつていくと私もは、思っております。女性アスリートの台頭が難しい国ですが、アフガニスタンの女性たちに勇気と希望を持ってもらいたい一心で、厳しい練習にも耐えてまいりました。

それでは、フアヒマさん、日本語でメッセージをお願いします。

フアヒマ・レザイさん

(アフガニスタン出身)

「皆さん、こんばんは！ 私がフアヒマです。本日、NPO法人柔道教育ソリダリティーの会員の皆さまに、これまでいただいたサポートに対し御礼を申し上げる機会をいただいたことに、心から御礼申し上げます。

まずはじめに、無名のアフガニスタンから来た選手のために、このような世界的なレベルの練習ができる東海大学柔道部で強化練習をさせていただいたことに対し、NPOの皆さまへ心から御礼を申し上げます。特に、山下泰裕先生、光本健次先生、中西英敏先生には、心の

底から御礼を申し上げます。

先ほども申し上げましたが、名もないアフガニスタンの一選手の私に、国際レベルの練習環境をいただき、講道館の初段を取得させていただきました。アフガニスタンの女性柔道家として初めての講道館初段です。このようなチャレンジができたこと、素晴らしい国、日本に来ることができたのも、NPOの会員皆さんや事務局の皆さんのお陰です。そして、私を根気よくサポートして下さいました。柔道部の皆さん、トレーナーの皆さん、本当にありがとうございました。

次に、少しアフガニスタンの柔道事情をお話しさせて下さい。実はアフガニスタン柔道連盟は私をアフガニスタンからのオリンピック選手として推薦しませんでした。このことはたいへん私を傷つけました。これまで私はアフガニスタンを代表してオリンピックに出ることで、社会的にたいへん身分が低く扱われ、アフガニスタン社会の底辺でひっそりと生きている、多くのアフガニスタンの女性アスリートを勇気付けられると思っていたからです。

これは、アフガニスタン柔道連盟

とアフガニスタンオリンピック委員会が非常にアンフェアで最悪な決定をしたことにつきます。ロンドン五輪へ出場できなかったニュースが届いたのは最愛の母の死を知らせる電話の直前の事でした。この二つのニュースは私にとって非常にショックなことでした。しかし、私は日本の友人やNPOのみなさんに励まされ、乗り越えることができました。

最後に、みなさんにお願いです。アフガニスタンの女性アスリートたちは自分たちの国に夢と希望を持ちたいと、毎日、一生懸命練習に励んでいます。これからもどうぞアフガニスタンの女性アスリートのサポートを宜しくお願いいたします。本当に今日はありがとうございます。I love Japan!! Thank you very much!!

(涙声で切なる想いや感謝の言葉を述べたレザイさんに対して、会場から大きな拍手が送られました)

ー 続きまして、ロシアのフローラ・ミカタリアンさんをご紹介します。フローラさんは十代からロシアのジュニア強化選手でございまして、

昨年まで現役の選手として活躍されておりました。それではフローラさん、よろしくお願いたします。

フローラ・ミカタリアンさん

(ロシア出身)

「NPO法人柔道教育ソリダリティーの皆さま、私の柔道の恩師、アナトリー・ラフリン先生にこのような素晴らしい環境をいただき、柔道のコーチング法を勉強させていただいたことに、心から御礼申し上げます。もちろん、6カ月では、嘉納治五郎先生が創設した柔道やその伝統的な背景を学ぶことは不可能でしたが、多くのことを勉強させていただきました。しかし私たちにとっては、日本のトップを誇る東海大学柔道部で柔道や日本語等を勉強できたことはたいへん誇りに思っています。

柔道の練習においても、柔道部の皆さんから頂いたサポートは忘れません。たとえば、柔道のトレーニングにおいても私たちにとっては全く新しい練習法も教えていただきました。また、3週間の講道館での国際セミナーは私の生涯で忘れられない体験をさせていただきました

した。

国際セミナーでは、世界一の寝技や固め技、柔道の歴史、日本の文化伝統等、そして私たちの持つていた技術を上らせていただきました。私はそこで素晴らしい日本の文化や伝統に出会いました。京都にも行つて、その歴史に触れました。京都は素晴らしい町でした！古いお寺や街並み…。そして5月に入つて、広島、福岡、熊本へ卒業旅行に行きました。この卒業旅行で、広島、宮島の世界遺産にも触れましたし、原爆博物館では心が痛むほど平和について考えました。福岡では、ロンドン五輪の選考大会を視察し、ドキドキしながらロシアのチームと日本の選手が対戦することを考えていました！

この6カ月間で、柔道を単なるスポーツとして捉えていた私の考え方は変わりました。柔道は人生の道であり、哲学でありそして金メダルを取るだけの柔道ではないことを学びました。私は柔道で学んだことを私の人生に活かしていきたいと思えます。日本の研修で学んだことは私のコーチとしての人生に活かされていくことは間違いないと思

います。

最後に、山下泰裕先生をはじめとするNPO法人事務局の皆さんに家族のように受け入れていただき、たくさんのお話を学ぶ機会を作っていただいたことに、心から感謝します。NPO法人の活動こそ、柔道の道が生かされている団体だと思います。本当にありがとうございます。

最後に、フローラさんと同じロシアからおいでのカーチャ・ブラウステバさんをご紹介します。

カーチャさんは、プーチン大統領の柔道の師、アナトリー・ラクリン先生の教え子さんでいらつしやいまして、フローラさん同様、昨年の秋まで現役の選手として活躍されておりました。それでは、カーチャさん、よろしくお願いたします。

カーチャ・ブラウステバさん

(ロシア出身)

「皆さんこんばんは！ 私は山下泰裕先生をはじめ、NPO柔道教育ソリダリティーの皆さま、そして私のロシアの柔道の師、アナトリー・ラフリン先生の支援を受けて、充

実した6カ月の研修を送ることができました。

皆さんと私がどのような研修をしてきたか、お話をさせていただきます。来日したのは今回が初めてではありません。しかし、子どもたちの柔道大会がたくさん開催されていることを今回発見し、驚きました。子どもたちは勝利に向かって、熱意を持って柔道の試合に臨んでいました。子どもたちはまだ柔道を始めて間もないのに、彼らの目には闘志の炎が燃えており、多くのすばらしい柔道の技も見ることができました。私は感動しました。

東海大学柔道部で練習を始めましたが、コーチの先生方をはじめ、特に女子の選手たちはとても親切で、いつも私たちをサポートしていただき、質問があればいつでも答えていただき、適切なアドバイスをいただきました。滞在中、いろいろなレベルの柔道を見て、またいろいろなレベルや年齢の子どもたちを指導する経験をするために多くの町道場や、大学を訪問する機会を得ました。最初は日本語が良く話せないのですが、子どもたちの前に立つて指導するのが恥ずかしいこともあり

ましたが、私がロシアで培ってきた技術が通用した時はとてもうれしかったです。

また、講道館初段の試験に合格したときは本当に心からうれしかったです。

今年4月からは、東海大学で柔道の初心者指導している井上康生先生のクラスのアシスタントも経験しました。これは私にとってとても名誉あることです。このような多くの経験を企画し、指導してくださった光本健次先生にこの場をお借りして御礼申し上げます。また、プライベートでも大変お世話になりました。

研修中に、私は日本の文化伝統、たとえば茶道、生け花も体験し、多くのすばらしい文化を通して多くのことを学びました。京都では着物を着る体験もしました。そして私たちがとても訪問したかった広島、福岡、そして熊本にも行くことができ、多くの神社仏閣を訪問することができ、歴史建造物にも訪問することができました。また、講道館で研修中に柔道の誕生の地を訪問することができたことは私にとつてはたいへん興奮したことでし

た。

このような中で、私は柔道をもつと学びたくまりました。

ロシアでは柔道は単なるスポーツとして捉えているコーチや選手が多くいます。私がつとも尊敬する、そして私にとつての最初の柔道の師であり、日本を、日本の柔道を心から愛しているアナトリー・ラフリン先生に教えていただかなかつたわけではありませんが、私はこの半年の間、柔道は単なるスポーツではなく、教育的なスポーツであることを再認識しました。帰国後は、柔道の教育的価値、そして、柔道を通して学んだことを、多くの柔道を学んでいる人に広げていきたいと思っています。

皆さんはすでにご存知のことと思いますが、ラフリン先生は先日、再度就任したプーチン大統領の柔道の師です。大統領の就任式が終わった翌日、プーチン大統領が最初にしたことは、新しくできた柔道場にロシア柔道ナショナルチームを訪ねたことでした。プーチン大統領がそこでみんなに言ったことは、改めて柔道が彼の生活の一部であり、人生の哲学である柔道をもつ

と普及させたいと述べました。

最後に、このようなすばらしい研修環境を設定していただいたNPOの事務局の皆さんに心から感謝申し上げます。ありがとうございます！

— この3名の研修生は、たいへん素晴らしい経験をさせていただきました。これもご支援いただいた法人の皆さまのお陰だと感謝申し上げます。本当にありがとうございます。

— 研修生3名は、日本に参りましてから一生懸命練習を積み重ねまして、講道館の初段を受験し、合格いたしました。また、本法人の研修修了証というのもございます。明日の帰国を前に、山下泰裕理事長から修了証の授与、一緒にトレーニングをしていただきました光本健次先生から初段の証書をお渡しいただきたいと思えます。それは3人の方、こちらにおいて下さい。

— 山下理事長より、3人にNPO法人修了証書・記念品授与が行われました。

— 光本健次東海大学教授より、3名に講道館「初段」授与が行われました。



東海大学の光本でございます。講道館からいただいた賞状を皆さんに渡したいと思えます。この3人は、本当に一生懸命努力してくれました。町道場の方、高校指導者の方、いろいろな方の所に行つて指導させていただき、本当に素晴らしい研修ができたと思っております。私もこの場をお借りして、お礼申し上げます。

— ファヒマさんに関してまして

は、先ほどご報告がありましたように残念ながらからロンドンオリンピックに行くことはできませんでしたが、しかし、日本で8kgもの減量を行いました。彼女は選手として大学の道場やその他で、本当に一生懸命練習に励んでくれました。

— 皆さま、ありがとうございます。それでは、引き続きまして本日の講演会、山下泰裕によります講演会をさせていただきたいと思えます。山下理事長、どうぞよろしく願います。

第2部

「柔道を通じた日中交流を語る」

山下泰裕

(NPO法人

柔道教育ソリダリティー理事長・

東海大学理事・副学長・体育学部長)

本日は、当NPO法人主催の第12回講演会に多くの方々にお集まりいただきまして誠にありがとうございます。

今日は「柔道を通じた日中交流を語る」というテーマでお話させていただきますが、その前に少しだけ今の3人についてお話ししたいと思います。

外国人研修生受入の成果報告

フアヒマさんは、先ほど紹介がありましたように、アフガニスタンの数少ない女性柔道選手です。実際にはアフガニスタンでは練習ができず、彼女はパキスタンで練習していました。彼女の受入れの経緯としては、当NPO法人事務局の小澤さんが彼女に関する情報を手当てしていました。そこで、我々で何か支援できることはないかと考え、彼女と連絡を取りました。すると、ぜ

ひ来日したいという本人の希望があり、実現したことでした。彼女は、この6カ月間一生懸命稽古に励みました。

そして、ロシアからのカーチャ・ブラウステバさんについてです。先ほどこから、アナトリー・ラフリン先生というお名前が度々出ています。この先生はロシアの大統領プーチン氏の柔道の恩師にあたる方で、私の友人です。そのラフリン先生から私に、「ロシアにも、技のみを追求した柔道ではなく、日本式の柔道を広めたい。若い優秀な指導者を日本に送るので、柔道の心を教えてもらえないだろうか。できれば半年ぐらい受け入れてほしい」という要請がありました。このような経緯で、お二人の研修が実現した次第です。

この度、ラフリン先生の弟子でありますプーチン氏が大統領に返り咲きました。おそらく、ラフリン先生を通して、この若き指導者2人の日本での様子などが、プーチン大統領の耳にも届いていることと私は信じております。

このようにして受け入れた3人の研修生のメッセージを先ほど聞いて、たいへん胸が熱くなりました。残念ながら多忙のため3人の指導にはほとんど関われなかったのですが、この6カ月間のさまざまなこと

が思い出されました。

なお、先ほどの事業報告でも話がありましたように、昨年の12月に1カ月間、イスラエル、パレスティナ両国の若手指導者を同時に、本法人で受け入れました。もちろん彼らは来日して初めて顔を合わせただけです。が、日本に来て分かったことは、エルサレム在住の彼ら二人は、お互い10分もかからない距離に住んでいるということでした。1カ月間の研修を終える頃には、「帰国したら道場を通して今後も交流することができたらいいね」といった会話を交わしておりました。このような感想は、前回までの同2カ国の研修の中では出てきませんでした。本法人の会員の皆さま、あるいは、ご支援いただいている関係者の皆さまのお力によるお陰であると思っております。

これからも会員の皆さま、多くの方々の協力を得て、可能な限りこのような活動を展開してまいりたいと考えております。どうぞ

よろしくお願いいたします。

北京オリンピックピックを目指した中国男子柔道チームの強化支援

ここからは写真を見ながら、本日の講演テーマであります「日中交流」についてお話ししたいと思います。

日中交流の話題が出ましたのは、2004年の6月のことです。これは、本法人を立ち上げる前のことになります。2003年から2007年までの4年間、私は国際柔道連盟の理事をしておりました。そして、2004年6月に、上海で開かれた国際柔道連盟の理事会に出席しました。その会議の後の懇親会の席で、中国柔道連盟の副主席(副会長)から相談がありました。

「山下さん、北京オリンピック開催まであと4年です。女子柔道の方は心配していませんが、男子柔道のことを考えると、夜も眠れない日が続きます」ということでした。というのも、中国の女子柔道は日本の最大のライバルで強いのですが、男子柔道はオリンピックで一度もメダルを取ったことがないため

す。

さらに、副主席は、「地元北京でのオリンピックで男子柔道も何とか頑張らせたいと思っています。山下さん、ぜひ力を貸してくれませんか？」と、私の両方の手を握って懇願されたのです。ちょうどその頃、日中の関係が非常に悪化していたときでした。北京で開かれたサッカーのアジア・カップ決勝終了後、日本公使の車が中国人サポーターに襲撃されるという事件もありました。私はその場で、「私のみならず、日本の多くの国民が北京オリンピックの成功を願っています。私にできることは限られています。私にできるだけ協力いたします」という返事をいたしました。

2003年にプーチン大統領と小泉総理大臣の間で日露賢人会を立ち上げようという話がありました。プーチン大統領が柔道に親しまれているという理由から、私が日露賢人会のメンバーの一人に選出されました。その会合を通じて初めてお会いしたのが、当時、トヨタ自動車の取締役会長で日本経団連の会長も務められていた奥田碩氏（現在、本法人顧問）でした。



会議当日、朝食を取りにいくと私より先に奥田さんがいらして、「よかつたら隣に座りなさいよ」と声をかけてくださったのです。そのとき、「僕も一橋大学時代に柔道をやっていました」という奥田さんの話から、二人の会話が弾み、食事が終わる頃には、「帰国後にぜひゆつくり話をしましょう」ということになりました。

その後、奥田さんと私は帰国後に再会を果たし、『武士道とともに生きる』（角川書店）という共著を出版しました。



先ほどの中国柔道連盟の副主席から話があったのは、その本の制作に向けて奥田さんと度々お会い

し、対談を進めている最中のことでした。そこで、副主席に頼まれたことにも触れ、「日中がお互いに理解し合うために柔道が役に立つのであれば、私にできることは限られています。できるだけ協力しようと考えています」と話しました。すると奥田さんは、「それはいいことだ。ぜひやりなさい」と賛成して下さるとともに、「どれぐらい費用がかかるのか」とたずねられました。そこで、私がある金額を呈示しましたら、「分かった。それは僕が準備しよう」とその場で引き受けてくださったのです。

その後、トヨタ一社でやるのはよろしくないという奥田会長の判断から、新日鉄ならびに全日空の二社にも参加を呼びかけてくださり、トヨタを加えた三社により、中国の男子柔道が北京オリンピックで活躍できるように支援する体制を整えてくださいました。

具体的な動きとしては、2006年1月に、私が中心となって中国の男子柔道選手を初めて受け入れ、東京の全日空ホテルで歓迎会を開きました。



私に関わる柔道を通じた日中交流は、このようにスタートした次第です。また、中国の選手たちの受け入れ施設として、東海大学の近くにあるアパートを3年間借り上げて、彼らが柔道の練習に打ち込めるようにしました。その際、柔道の実技を指導するだけでなく、心の交流や文化交流も図れるように、東海大学で日本語も学べるようにいたしました。当時、なぜ私が中国の男子柔道選手を受け入れたのか、狙いはどこにあるのかについて、彼らにも詳しく話をしていました。

日本と中国の交流は言うまでもなく長い歴史があり、さまざまに交流を行ってきました。しかし、近年は日中の関係がよろしくない。そこで、柔道を通してお互いがお互いを理解し合うことができるのであれば、私のできるかぎりのことをやってみようと考えている。また日本

人が北京オリンピックの成功を願っているということを、こうした活動を通じて伝えたいのだということをお話しました。中国の選手たちには全日本学生柔道連盟の合宿にも積極的に参加してもらいました。そこには、今度のロンドンオリンピックに出場する穴井隆将選手や、北京オリンピックで優勝して総合格闘技に転身した石井慧選手など、日本のトップクラスの柔道選手たちがいます。彼らと一緒に稽古を重ねてもらいました。そして、われわれ日本人が北京オリンピックの成功を願っているということを機会あるごとに中国の選手たちに伝えました。そうしたわれわれの期待に応えるかのように、彼らは非常に礼儀正しく、稽古にもよく励んでくれました。



こうした中国の選手たちのことを東海大学の近隣の人たちも高く

評価してくれていました。例えば、大学の近くに日帰り温泉があるのですが、彼らも疲れたときにはそこを利用していました。あるとき私がその温泉に行きますと、他のお客さんから「東海大学に來ている中国の柔道選手たちは礼儀正しくて素晴らしいですね。びっくりしました」という話を聞かされたことがあります。

日中交流の開始を機に発足した NPO 法人柔道教育ソリダリティー

NPO 法人柔道教育ソリダリティーは、こうした中国からの選手たちの受け入れた 2006 年 4 月からスタートさせた次第です。実は、本法人が設立されたのは、経団連の奥田会長のご助言によるものでした。

「あなたは素晴らしい活動を行っているが、大事な時間をその活動に使うよりも、その活動を行うための資金集めに時間を取られているようですね。それならばたとえ小さくともいいから組織を立ち上げて、広く、浅く、多くの人から協力を得られるようにしたら、あなたの限られた時間をより有効に、

本来の目的のために使えるのではありませんか」というアドバイスでした。さらに、奥田さんもその組織づくりに協力してくださり、本法人が実現したのです。

さらに、その年の 6 月、日本外務省から「日中交流について意見交換をしたい」という連絡があり、事務局長の光本さんと二人で訪ねました。すると、外務省の方から「山下さん、北京オリンピックを指して中国の男子柔道を応援されていますね。この素晴らしい取り組みを、北京オリンピックまでの限られたものとして行うのではなく、中期の取り組みとして行ってみてはいかがでしょう。外務省がその取り組みを支援します」という提案をいただきました。

その詳しい内容というのは「多額な費用のかかる ODA の案件だと政府間交渉となるため、推進するのがなかなか困難である。ところが、上限 1000 万円までの草の根文化無償資金協力なら、現地の日本大使館の判断で行うことができそうです。その範囲内で、柔道を通して活動をやりませんか」ということでした。

この申し入れは、私たちの趣旨とも合致することですので、直ぐに日中友好の柔道館をつくる候補地を探しました。有力な候補地として上がってきたのが、青島でした。そこは、中国国際柔道大会が毎年開催されていて、中国の中でも柔道がたいへん盛んなところでした。その年の 11 月に早速、私と光本さんとで青島を訪問しました。現地の政府関係者や体育関係者、市の柔道連盟の方たちと意見交換を行う一方、青島海洋大学や現地の日本人学校などで講演を行いました。



なお、このとき、柔道の創始者・嘉納治五郎師範が日清戦争終了後、「宏文学院」という学校をつくり、中国からの留学生を真っ先に受け入れたということを、青島の柔道関係者から教わりました。十数年間で 7000 人以上もの留学

生を受け入れたそうです。そして、嘉納治五郎先生の下で学んだ学生たちの中には、毛沢東の親戚や魯迅をはじめ、帰国後に国会議員として祖国ために活躍した人が数多くいたそうです。

お恥ずかしいことに、当時私は体育学部の学部長を務めておりました。しかし、嘉納治五郎先生に関するこの重要なエピソードを中国の方たちから教えていただいた次第でした。

ところで、先ほどからお話していますように、我々が目指している交流というのは、単に柔道衣や畳の支援、柔道の技術指導を行うだけではありません。柔道を通じた交流によって、「柔の心」「和の心」「日本の心」といったものを伝えたいという想いが、その根底にあるのです。柔道交流や文化交流を通して、お互いが理解し合える関係を築きたい。もっと分かりやすく言いますと、日本に対する興味や関心、理解、あるいは信頼を増やしていきたい。こういう思いがあるものですか、私はどこへ行っても必ず講演会を開くようにしているのです。

青島と南京に 日中友好を推進する道場を開館



この写真は、青島のたいへん美しい海岸です。日中友好青島柔道館の館長である徐殿平先生は、30、40年前にこの砂浜で柔道を教えておられました。ここからスタートしているのです。



これは、日中友好青島柔道館の調印式の写真です。このときには、中国日本大使館の井出敬二公使にもご出席いただきました。現在、井出さんは、モスクワにある日本大使館で次席公使を務められています。

すので、日露交流にもつながれるのではないかと期待しております。



これが、完成した日中友好青島柔道館です。入口には、柔道創始者の嘉納治五郎師範の写真をはじめ、柔道訓練の目的や「精力善用」「自他共栄」といった言葉が掲げられています。

2007年11月、日中友好青島柔道館の開館式に私も出席しました。この柔道館で柔道をやっている子どもたちでございませう。



この年には外務省から再び、「柔道を通じた日中交流の中心となるべき人材を日本に招待してみたいかがですか。外務省も支援いた

ますよ」というありがたいお話をいただきました。そこで、われわれは中国から3名の方を招きました。日中友好青島柔道館館長の徐殿平氏、中国柔道連盟の事務局長熊鳳山氏、そして、これからお話しする日中友好南京柔道館館長の劉俊林氏です。彼らには、本法人の理事である外務省元大使の小川郷太郎氏の元へ表敬訪問していただきました。また、われわれとも、これからの日中交流についていろいろと意見を交わしました。

この写真は、2007年12月のもので、北京外国語大学を辞められた大手前大学の教授をされている廠安生先生を招いて講演会を行いました。



2008年、ついに北京オリンピックが開催されました。お手元に資料が配られていると思いますが、8月28日に中国共産党の機関紙で

ある『人民日報』に私の記事が大きく掲載されました。その中には、柔道創始者・嘉納治五郎師範のことや「精力善用」「自他共栄」のことについても詳しく紹介されていて、私自身たいへんうれしく、ありがたく思った次第です。

北京オリンピックから帰国しましたら、たいへん驚いたことがありました。終戦記念日である8月15日、読売新聞に「南京に日中柔道場、友好のために山下動く」といった記事が大きく掲載されていたのです。これは、先ほど話しました日中友好青島柔道館をつくり始めたときに、南京の方が私を訪ねてこられ、「青島の次は、ぜひ南京にお願いします」という依頼があり、そのことが記事になったものです。

ところが、私の対応は、新聞記事の内容とは異なり、たいへん失礼なものだったと反省しています。そのときの私は、「この取り組みは、日本の税金を使っているのですから私が簡単にお約束するわけにはいかないのです。まずは青島の柔道館が成功して、日中友好のためになると認められたとき、はじめて2つ目を検討してもらえます」と

答え、門前払いのような対応をしていました。

しかし、日中交流にとって大きな棘ともいえる南京。その南京の方から申し出があつたということは、私たち日本人にとつて願つてもないことでした。実は、南京にも建設の話があり、水面下では動いておりましたが、この時点では未だ資金を出していただく外務省に一言もお話していませんでした。ところが、その新聞記事にはあたかも南京柔道館をつくることが決まっているかのように書かれていたのです。外務省の方がこれを見て、気分を悪くされていたら困つたなと思い、本法人の小川理事に相談しましたら、「分かりました。早速、私が外務省に聞いてみましょう」と引き受けてくださいました。

その結果、私の心配に反して、外務省の方から「山下さん、またとない機会ではありませんか。ぜひ進めましょう。青島の成果を待つ必要はありません」という返事をいただきました。そして、「善は急げ」ということで、青島柔道館の1周年となる2008年11月、本法人の光本事務局長と一緒に南京を

視察に訪れました。

本場に柔道場を受け入れてもらえるのかどうかを確認したかったのです。その時に、南京大学で柔道を通した日中交流について講演させていただきました。その時の参加者は、日本人や柔道家、日本語を学ぶ中国大学生がそれぞれ3分の一ずつで、約200人の方たちが参加してくれました。そして、講演中は同時通訳のイヤフォンを外して私の日本語に耳を傾けてくれた人が大勢いました。



講演後の質疑応答では、「山下さん、あなたの日中交流にかける熱い想いはよく分かりました。ところで、なぜ南京に柔道館をつくるのですか」という質問がありました。そのとき私は、「これからの日中の友好を考える上で、南京以上にふさわしい土地を見つけることができなかつたからです」と答えました。

すると、会場の皆さんが大きな拍手を送つてくれました。そのとき、われわれの活動の何らかのものが中国の人たちにも理解していただけたのだなという思いがこみ上げたのを覚えています。

そして、このとき青島柔道館の1周年記念行事にも参加しました。その時、館長の徐先生から、「中国のテレビキャスターと対談してもらえませんか」という依頼があり、受けることにしました。それは、中国国営中央テレビの取材で、崔さんという中国の人気キャスターとの対談でした。



崔さんは柔道経験者ではありませんが、取材当日は私と同様に柔道衣を着てこられました。そして、柔道についてもたいへんよく勉強されていて、柔道の創始者である嘉納治五郎先生のことや柔道の目的などについてもよく知っておられま

した。その対談の様子は同時通訳が行われ、北京から3台、青島から3台のカメラの計6台ものテレビカメラで収録が行われました。そのとき収録した内容は、2009年2月に45分間番組として放映されました。この崔さん、今年2月にも来日されたのですが、現在、私の非常に親しい友人の一人でございます。

日中友好南京柔道館の候補地は、南京を中心とする江蘇省のナショナルトレーニングセンター(女子専用のトレーニング場)を改装するという計画でした。500畳ぐらいの柔道場を柔道館にして、一般の市民にも開放したいということでした。話は順調に進み、調印式も行われました。



その後、2010年3月1日に、2つ目の「日中友好南京柔道館」の開館式が行われました。私も柔道

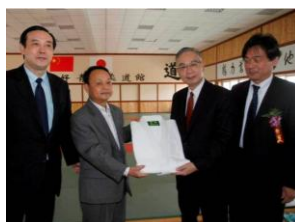
衣を着て出席し、実技指導を行いました。このときの様子は、日本のマスコミでもさまざまに取り上げていただきました。

この柔道指導が終わった後、日本の記者から「この道場には、日の丸と中国国旗が並んでいますか?」という質問がありました。青島柔道館にも日中の国旗が2つ並んで掲げられていますし、私はそれが当たり前だと思っていましたので、何って馬鹿げた質問をするのだろうかと思いましたが、「この柔道館は日中友好のためのものですよ。ここにどちらか一方だけの国旗があつたらおかしくないですか!」と少し怪訝な顔をしてその質問に答えました。後からいろいろな方の話を聞いて分かったことですが、中国国内で、とくに南京では、日中両国の国旗が並んで掲げられるということは非常に珍しいことだそうです。

2つの日中友好柔道館を拠点に さまざまに展開する日中交流事業

次に、青島と南京の2つの柔道館を中心に、当法人が取り組んでおります日中友好事業についてお

話しします。南京柔道館については、丹羽宇一郎駐中国全権大使に同館を視察していただいております。青島柔道館の方では、子供用リサイクル柔道衣の依頼があり、本法人がリサイクル柔道衣を集めてこれを送付しました。すると、当時の宮本雄二大使がわれわれに代わってそれを届けてくださいました。



また、本法人の多くの指導者に青島柔道館・南京柔道館の方へ行っていただいております。本法人副理事長の橋本敏明先生には、南京と青島の両方の柔道館に行つていただいております。柔道の心についてのレクチャーもしていただきました。



先ほど3人の女子柔道家に証書を授与していただいた光本先生には、中国ナショナルチームの男子の強化にもご尽力いただきました。光本先生は決して小柄な体格ではありませんが、この写真では中国の重量級の長身選手と並んでいるので、とても小さく見えます。



かつて、世界選手権で優勝した柏崎克彦先生にも青島柔道館でのご指導いただきました。また、元世界選手権のメダリスト村田正夫先生には南京柔道館の1周年記念行事に出席いただき、柔道のデモンストラーションや指導、講義などをしていただきました。

また、本法人から中国にボランティア学生の派遣を行いました。朝比奈竜真君と荘司和夫君の2名を南京柔道館に派遣し、穴井亮平君と椎谷良平君には青島柔道館へも行ってもらいました。彼らは現地で指導を行ってくれたわけですが、

彼ら自身もさまざまなことを学んで成長して帰ってきました。これからも、長期休暇を利用して大学院生や大学生たちを派遣していきたいと考えています。また、昨年の全日本選抜柔道体重別選手権大会の90kg級で優勝した東海大学大学院学生の穴井亮平君は、南京にも派遣しました。

光本先生が中国の男子柔道チームを指導した際、その中に一人、有望な若手選手がいました。彼は、ほとんど柔道経験がない選手でしたが、柔道の素質に恵まれていて、将来とても頼もしい人材です。彼も本法人の活動を通じて、日本や東海大学のことをすっかり気に入ってくれました。



そして、2010年度から東海大学体育学部に入學し、現在、3年生です。先日開かれました東京学生柔道大会の団体のメンバーとして出場しました。2試合目まではい

ずれも1本勝ちでしたが、3試合目に苦戦して、技ありを取られてしまいました。今後、彼は中国の中心選手となって活躍していくでしょう。たいへん素晴らしい素質を持っていますし、心も素直ですので、我々はたいへん期待しております。

国際交流基金助成事業コーチ招へいとしては、青島柔道館からは女性の王華さん、そして南京柔道館からは常東氏を招き入れて、6カ月間の研修を行いました。お二人は帰国後、それぞれの柔道館で中心指導者として指導を行っています。

昨年6月には、青島柔道館で集めた東日本大震災への義援金を携えて、青島柔道館長の徐先生と王華さんが来日してくださいました。私も彼らと一緒に石巻を訪問させていただきました。先ほど議長を務めて下さいました寺澤豊志先生（全日本柔道連盟柔道ルネッサンス特別委員会都道府県部会長）のご紹介によるものです。

青島柔道館との交流は継続的に続けていて、2009年より毎年、1月あるいは2月に青島柔道館の子どもたちが日本にやって来てい

ます。そして、東海大学、望星学塾、あるいは講道館などさまざまな所を訪問し、交流を重ねています。このような活動が本来の草の根運動、もしくは民間交流といったものではないかと思っています。



日本からも2009年8月には、松前柔道塾の塾生たちが青島を訪問しています。先ほどの南京柔道館のコーチである常東氏は、現在、南京柔道館主任として仕事をされています。先ほど橋本副理事長の話にもありましたが、南京は国際都市です。ここでは中国人だけではなく、いろいろな国籍の人たち、そして、子どもから大人までの幅広い人たちが柔道を学んでいます。

この写真は、礼をしているところです。彼の柔道指導法について、橋本先生の報告によりますと、日本人よりもっと日本的な指導を行

っているとのことでした。



つまり、挨拶や礼を非常に大切にしているということです。常東さんは6カ月間の日本での研修中に日本語をたいへんよく勉強されたのですが、帰国後も日本語学校に通って勉強しているそうです。このことについては、この後の懇親会で橋本副理事からも詳しく聞いていただけたらと思います。



この写真は、青島柔道館の取り組みを写したものです。道場にはたくさんの方の木の札が掛けられています。いろいろな子どもたち、あるいは大人が頑張っています。昨年

は、「砂浜から世界へ」というテーマで、青島柔道館主催による柔道大会を開かれたそうです。館長の徐先生が非常に熱心な方で、青島柔道館ができてからは、青島の中学校で柔道を正課で教えるところがいくつか出てきているそうです。

2011年12月には「日中友好青島柔道館4周年記念事業」があり、私どもも青島を訪問してきました。その際、中国ナショナルチームの指導者を全員集めて講演会を行ったのですが、同時に中学校も視察させていただきました。



これは、本法人が作成しました『柔道入門(柔道初級教則本)』の中国版です。南京柔道館2周年記念行事の一環として、今年の3月にこの本の贈呈式を行おうと予定していました。それに合わせて全日本学生柔道連盟のチームを組んで、青島と南京の2つを訪問する予定でいました。そして、私も2周年記念式典に出席し、本の贈呈式、2

周年記念セレモニー、柔道指導、そして再び南京大学での講演会などを企画しておりました。

ところが、たいへん残念なことに、今年2月に河村たかし名古屋市長が「南京大虐殺」を否定する発言をしました。私が中国へ出発する5日ぐらい前のことでした。そのことが原因で、「日中友好南京柔道館2周年記念事業」は中止となりました。このときの経緯についてですが、河村市長の発言が新聞でも大きく取り上げられ、日本でも中国でも問題になりました。すると、南京市の方から「治安面の問題があるから、この記念事業は取り止めるように」という指導が南京柔道館の方にあつたそうです。すると、南京柔道館長の劉先生をはじめ、南京の柔道関係者は、「心配ない。こういう時期だからこそ、この記念事業をやりたい」と主張し、私にも「絶対に来てください」ということでした。

ところが、その後、南京市の意向だけではなく、中国政府も問題視していることが判明しました。すると、さすがの劉先生も「中国政府もそのように見なしているならば、

それに従うしかありません。たいへん残念ですが、今回はわれわれも諦めます」ということになり、2周年記念式典が中止となったのです。

今回は中止となりましたが、本法人と南京柔道館との交流は今後も続いていきます。そして、必ずまた南京、あるいは青島を訪問する機会があると考えています。

本日は、NPO法人柔道教育ソリダリティーが発足する前からの日中交流についていろいろとお話させていただきました。このような活動を通じた交流ができますのも、本法人の会員の皆さま、そしてご協力いただいております企業の皆さま、外務省、国際交流基金など、こういった団体のお力添えのお陰であると感謝しております。これからも皆さまにお力添えをいただきながら、柔道の交流を通して「柔心の」「和の心」「日本の心」を世界に向けて発信し、海外の方の日本に対する興味や関心、理解が進むよう活動を続けてまいりたいと考えております。

皆さま、ご意見やご質問、ご要望などございましたら、この後の懇

親会で遠慮なく私の方へ声をかけていただければと思います。また、先ほどの3名の女性柔道家も参加いたします。彼女たちは英語が堪能ですし、簡単な日本語も理解できますので、どうぞ皆さまからもお声をかけていただければと思います。

本日は最後までご清聴いただきましたことに心から感謝いたしました。どうもありがとうございます。

— どうもありがとうございます。—
 それでは引き続き交流会に入らせていただきたいと思います。山下理事長も申ししていましたように、理事長もおりますし、3人の女性柔道家もおりますので、どうぞご歓談いただきたいと思います。本日は長い間お付き合いました。ましてありがとうございます。また、この1年、私ども本法人も頑張つてまいりますので、皆さまのご支援、ご理解をいただきますよう、どうぞよろしくお願い申し上げます。誠にありがとうございます。